

# ハンス・キュンクのエートスとしての 世界倫理についての一考察

— 世俗社会における宗教間対話の展開の一例として<sup>1</sup> —

**A Consideration of Hans Küng's Global Ethic as Ethos:  
An Example for Developments in an Interfaith Dialogue  
in a Secular Society**

藤本 憲正  
Norimasa Fujimoto

キーワード

ハンス・キュンク、世界倫理、宗教間対話、世俗社会、人間性

## KEYWORDS

Hans Küng, Global Ethic, Interfaith Dialogue, Secular Society, Humanity

## 要旨

本論では、カトリックの神学者ハンス・キュンクの世界倫理を分析して、宗教の側からみる世界倫理の形成へと至る諸段階を明らかにする。世界倫理は、自己反省と相互学習の形成過程を経て、諸宗教だけでなく世俗の立場との間でも共有されうる義務的な倫理である。この倫理の中心には、人間らしくある事という根本的合意がある。先行研究では、この合意に基づく人間らしくある事が、諸宗教や世俗の倫理の文脈にてどの様に意味づけられるのか曖昧だという指摘があった。しかし本論では、先行研究が解明していなかったキュンクの次の点を明らかにすることで、その人間らしさがどのように各文脈で意味を持つのか示す。その点とは、世界倫理の人間らしさは、宗教を持つ人々や世俗的な人々にとって単に直感的に承認されるものではなく、諸倫理の文脈におけるそれらの人々の自己反省と相互学習を通して段階的に形成される点である。その結果、この発展の先に、諸宗教と世俗の立場との間で将来に共有されうるある一つの人間らしさの理念が期待される。

## SUMMARY

The aim of this paper is to analyze the features of Hans Küng's Global Ethic. Hans Küng is a Roman Catholic theologian who previously focused on the Global Ethic in his theological activities. In this theory, the ethic is a duty shared among religious as well as secular people based on the premise that everyone shares an elemental consensus of ethics: humanity. Previous research works argued that this idea of humanity could not have sufficient meaning in the context of local ethics. However, this paper's goal is to demonstrate that Küng's concept of humanity implies ethical directions in every local ethic, which is done by showing that the Global Ethic gradually develops into a common humanity. Common humanity develops in two phases: becoming humanistic in religious ethics according to its own logic and then, under the effect of this, becoming humanistic in secular ethics.

## 0. はじめに

ローマ・カトリック教会の神学者ハンス・キュンク (Hans Küng, 1928-) は、宗教間対話を推進した人物として著名である。その彼は、1990年に「世界倫理 (Weltethos)」を発表した。この倫理は、諸宗教の間だけでなく、世俗の立場との間でも共有されることを目指した。さらに、キュンクはこの倫理を発展させて、1993年には「世界倫理宣言」を発表した。この倫理は、反響を呼び、賛否両論の議論があった。日本でも、「地球倫理宣言」と翻訳されて、この宣言に関連するキュンクの著作の日本語訳も出版された<sup>2</sup>。キュンクに影響を受けて、他の宗教間対話の論者であるポール・F・ニッター (Paul F. Knitter) やジョン・B・カブ・ジュニア (John B. Cobb B, Jr.) もまた、諸宗教に共有されることを目指す同様の倫理を提唱した。

一方、世界倫理に対する批判では、次の点が指摘された。世界倫理は、どのように諸倫理の文脈にて意味づけられるのかが曖昧だという点である。その結果、諸々の固有の倫理の中で生きる人々に対して、世界倫理は内実や規範力を持たないと批判されるのである。しかしながら、本論では、このような批判は、世界倫理の内容を正確には捉えていないと指摘する。そのために、キュンクの世界倫理の内容と作成の経緯、世界倫理に対する批判の実態、そしてキュンクの考えを整理する。それを通して、世界倫理は、その承認と実現のためには、自己の立場に対する反省に加えて、他の立場との間の相互学習という段階が必要とされており、たんに直感的に理解されるようなものではないという点が見出される。

その段階とは次のものである。すなわち、諸宗教の人間にとっては、世俗の人間存在に対する理念的な理解の承認を通して、宗教者としての自己の人間理解を反省し、自己の倫理的伝統における人間存在の理解を深める。この宗教の側における反省と自己理解の変化は、世俗の立場の人々にも同様の反省の機会を与える。それにより、世俗の人間存在の理解がより深められ、人間存在をより尊重ようになる。ただし、この宗教の側から始まる、人間存在の尊重をより深める反省と自己理解の変化は一度きりの機会ではない。むしろ、諸宗教と世俗の人々は、繰り返しこの機会を与え合って相互に学習していくのである。

ただし、注目すべきは、その世俗の立場における変化が宗教によって引き起こされるに際して、宗教と世俗の人々の立場の違いにキュンクが留意する点である。すなわち、たしかに諸宗教は世俗の人々に対して人間存在の理解に対して反省を促すが、しかし、信仰の要求には至らないのである。というのも、世俗の人間理解の背景には、宗教と結びついた文化のエートスが存在し、諸宗教は、このエートスとして反省を経た自らの人間理解を明示するからである。それゆえ、世界倫理は、諸宗教が先導して人間理解を深め、諸々の立場において人間存在がより尊重されていくという過程を含んでいる。そして、その過程を経て、世界倫理は、将来に諸々の立場の間で共有されてゆく、ある一つの理念的な人間らしさのあり様を意味することが期待される。

## 1. 世界倫理の作成経緯

はじめにキュンクの世界倫理の作成経緯を簡潔に紹介する。まず、キュンクが諸宗教の人々との対話を具体的に始めたのは、1984年の著作『キリスト教と世界諸宗教』<sup>3</sup>からである。本書にてキュンクは、「諸宗教の間に平和無くして、世界に平和なし」<sup>4</sup>の目標を立てた。そして、諸宗教は国際政治において平和のための役割と責任があるとした。1988年には、『中国宗教とキリスト教の対話』を儒教の専門家との共著で発表した。この著作では、キリスト教の文化内開花 (*inculturation*) について中国を事例に検討した。

さらに、その後、この考えを深めるうえで二つの大きな機会を得た。一つ目は、1989年2月にパリで行われたユネスコのシンポジウムであった。諸宗教の代表が招かれて、キュンクが提示した、人間らしさを同意の基準とする諸宗教に共有の倫理を討議した。二つ目は、1989年10月のダボス世界政治経済会議であった<sup>5</sup>。そうして、諸宗教が教義に関するあらゆる違いにもかかわらず、共有の根本的倫理を持つことができると構想したのである<sup>6</sup>。

1990年には、これらの研究を基礎にして『世界倫理計画』を出版した。本書にて

キュンクは、「世界倫理」を主唱した。この倫理にて主張されたのは次の点である。どのように人間らしくあるべきかという人間の倫理的あり様は、諸宗教だけでなく、世俗の立場の人々とも共有の倫理を構想する際に同意する基準になるという点である。すなわち、「人間」を倫理の根本的合意となし、その合意に基づく社会共通の人間らしくあるための義務的倫理の発見を目指したのである<sup>7</sup>。

キュンクは、その試みを通して、諸宗教は国際社会における平和に対する役割を果たしうると考えた。そして、次のことを提唱した。「諸宗教の間に平和無くして、諸国家の間に平和なし。諸宗教の間に対話なくして、諸宗教の間に平和なし。神学的な基礎研究無くして、諸宗教の間に対話なし」<sup>8</sup>である。

この世界倫理は発表後、宗教間対話を進める人々から支持を得た。キュンクは、1993年にシカゴで開かれた世界宗教会議<sup>9</sup>の開催準備をしていた人々から、諸宗教の代表による倫理宣言の原案執筆を依頼されたのである<sup>10</sup>。1992年夏から翌年7月にかけて様々な宗教の代表が参加してキュンクの原稿に手を入れた。そして、1993年8月の会議にて「世界倫理宣言」として採択された<sup>11</sup>。この宣言は、人間という根本的合意について、次のように明らかにした。「どの人間も人間として扱われなければならない」という根本命題である<sup>12</sup>。さらに加えて、この人間がどのようなものであるべきかについて、諸宗教の古来の教えに由来する四方針を提示した<sup>13</sup>。そして、世俗の立場の人々に対して、この倫理を共有するように呼びかけた。その後、1995年10月にキュンクは「世界倫理財団」をドイツのテュービンゲンに設立して、世界倫理の研究・教育活動のための拠点とした<sup>14</sup>。また、世界倫理を巡って、キュンクは、諸学問や政治の分野の人々と議論した。例えば、1997年に開かれた第15回インターアクションカウンシルにて採択された「人間の責任に関する世界宣言」である<sup>15</sup>。

## 2. 世界倫理に対する批判

次に、キュンクの世界倫理に対する批判を取り上げる。その批判は主に次の五つの内容である。これらの批判では、世界倫理が、諸倫理の文脈において、どのような意味を持つのかを問題にしている。

一つ目に、世界倫理は諸文化の固有の倫理を軽視して、新しい一つの倫理に置き換える普遍主義だというものである<sup>16</sup>。

二つ目に、世界倫理は諸倫理から最低限の共通の部分抽出した倫理だというものである。そのような倫理は、確かに内容に関して由来は諸倫理にあるかもしれないが、実際には諸倫理とは異なる別の倫理を形成しているという批判である<sup>17</sup>。

次に三つ目の批判である。この批判によれば、たしかに世界倫理の人間という基準

は根本的同意であって諸倫理の置き換えや抽出ではない。しかし、その人間らしさについてだけ、各々の倫理の立場から対話して相互理解を深めたとしても、不十分である。というのも、各々の倫理の内容には、人間らしさに関すること以外の部分が残っているからである。この残りの部分との関係において、対話を進めた人間らしさが持つことになる意味は、各々の倫理の文脈にて異なっている。そのため、たとえ対話をしても、人間らしさの内容は、諸立場の間で一致しない。それにより、世界倫理は、各々の倫理の中に生きる人々が直面する実際の課題を取り扱うことが困難になっているという<sup>18</sup>。

さらに、四つ目に、次の指摘がある。世界倫理は、人間という原則のみを提示するにとどまっているため、その人間らしさに関する共通の内容には未だ具体性が無い。そのため、より一層の対話を通して世界倫理に内実を与え、諸共同体の間で成長させる必要があるという<sup>19</sup>。

最後の五つ目に、根本的合意である人間という点が、諸倫理の規範の外部から取り入れられ、しかも諸倫理を評価することになっているという批判である。すなわち、人間という基準そのものが近代的価値に従って持ち込まれており、しかもそれに従って諸宗教の倫理全体を評価しようとする点を批判する。もっとも、キュンクは、外部から持ち込まれているように見えるものを逆方向に転換して、この人間という基準が諸宗教に基礎づけられるとしている。それでもなお、実際には世界倫理が求める人間らしさのあり様がどのようなものか明確ではないというのである<sup>20</sup>。

このような批判に対して、キュンクは次のように述べている。世界倫理は、諸文化や宗教に固有の諸々の倫理を置き換えたり、それらの上位にある新しい倫理であったりしない。また、諸々の倫理から共通部分を集めた最小主義でもない<sup>21</sup>。むしろ、対話を通して各々の共同体間の内部にて、まずは世界倫理宣言に示された最小限の共有の倫理が発見される。その上で、さらに人間らしさをめぐってより多くのものが発見されていくという<sup>22</sup>。

このようなキュンクの主張は、先述の五つの批判とは一致しない。本論では、この五つの批判が、世界倫理を正確に捉えていない批判だと考える。また、キュンクの論述自体も、これらの批判に対して明確な回答になるような仕方にはなっていないと考える。

しかしながら、そのキュンクの論述を詳細に検討するならば、キュンクは諸宗教と世俗の立場に共有される人間らしさのあり様に関して段階論をとっていることがわかる。

まず、はじめに、各々の宗教において探求され続ける固有の人間らしさのあり様、および、基本的人権を尊重するような世俗の人間性がある。加えて、二つの人間らし

くなる事が、想定されている。まず、諸宗教が、自らの立場においてより人間らしくなる事である。次に、諸宗教の影響によって、世俗の立場がより人間らしくなる事である。その上で、諸宗教と世俗の立場との間において、対話を通して将来に共有されてゆく、ある理念的な人間らしさのあり様がある。

それでは、続いて、これらの段階的な人間らしさのあり様と、それに対応する二つの人間らしくなる事が、キュンクの世界倫理を巡る論述においてどのように展開されているのかを明らかにしたい。それによって、先述の批判とキュンクの主張の齟齬が、キュンクの主張に沿って解消されるだろう。その結果、世界倫理の構想についてのより正確な理解に至るはずである。

### 3. 世界倫理の人間らしさという基準

世界倫理の議論の前提にあるキュンクの考えとは、次のものである。宗教とは、世界における人々の対立の原因になるのみではない。それと同時に、人々の平和を作り出す原因でもあるのだという確信である。例えば、キュンクは、著書『世界倫理』の冒頭にて、両世界大戦から戦後の民主主義の問題を議論して、宗教の倫理的な面での可能性を述べる。

このような宗教が世界の平和にとって持つ意義を果たすために、キュンクは人間らしさを課題として取り上げる。この人間らしさをめぐって、世界倫理におけるキュンクの中心的な洞察は、次の引用のとおりである。

- ・真の人間らしさは、真の宗教の前提である。すなわち、人間が人間らしくある事（人間の尊厳と基礎的価値の点で）は、諸宗教に対して最低限の要求である。少なくとも人間性（最低限の基準）は、人々が本当に宗教性を実現したいと望むところでは、存在しなければならない。
- ・真の宗教は、真の人間らしさの完成である。すなわち、宗教は、人間が人間らしくある事の実現にとって最善の前提である。まさに宗教（最大限の基準）は、人々が真に無条件なそして普遍的な義務として人間性を実現し具体化しようとしているところでは、存在しなければならない<sup>23</sup>

この引用においてキュンクは、人間らしさについて、二つの側面を指摘している。まず、人間の尊厳と基礎的価値のような人間性の側面を挙げる。これは世俗の立場からみた人間らしさの一側面である。しかし、人間性という側面は、人間らしさが持つ必要最低限の側面に過ぎない。

キュンクによれば、宗教は、この人間性を基礎づけるような根底に至る真の人間らしさを可能にする。そして、この真の人間らしさを実現するような宗教は、真の宗教である。したがって、諸宗教は、世俗的な人間性とは矛盾しない。むしろ、宗教が真の宗教であろうとするならば、この人間性を自らに受け入れなければならない。キュンクは、基本的人権が含むような人間性を自らにおいて実現しない宗教は、今日もはや信用に足るものではないとまで言う<sup>24</sup>。

このように、宗教は真の宗教であるために人間性を受け入れる。キュンクによれば、宗教はより根底に至る人間らしさを知っているからである。その意味で宗教は最大限の基準である。そして、宗教はそのようなものであるから、世俗的な人間性を基礎づけることができる。そのように基礎づけられた人間性は、宗教によって真に無条件で普遍的な義務として実現することになる。それゆえ、宗教は、世俗的な人間性の実現にとって必要不可欠なのである。

加えて、宗教が真の宗教であろうとするならば、宗教の人間らしさに基礎づけられた世俗的な人間性の進展を通して、真の人間らしさを完成し実現していかなければならない。真の人間らしさとは、そのような世俗的な人間性をも含むものだからである。

このようにしてキュンクは、人間が人間らしくある事を基準にして、宗教と世俗的な立場との関係を規定している。では、このようなキュンクの主張がどのように議論されているのかを、次の順番で明らかにしていきたい。まず、世界倫理における「人間」という倫理の根本的合意が対象とする範囲について論じる。次に、その合意の基準とする「人間」が、キュンクの議論のなかで、どのようなことを意味するのかを検討する。さらに、それぞれの議論において、諸宗教同士の対話、加えて、諸宗教と世俗の立場との対話の二つに分けて論じる。

## 4. 黄金律としての人間らしさ

### 4-1. 宗教と人間らしさとの関係

前述のように、キュンクは、世俗的な人間性と宗教の人間らしさを対立的には捉えてはいない。むしろ、宗教はより深い人間らしさを持つのだとして、宗教が世俗の人間性を包括できるとしている。

このことは、1978年のキュンクの著作である『神は存在するのか』<sup>25</sup>にて議論されている。その議論によれば、宗教は、人間の生が持つ意味や価値について、世俗的な立場からよりも、より深い根拠を示す。それによって、宗教は、人間が苦難のときも虚無主義に陥らずに、その生に意義を見出して生きることを可能にするのだという<sup>26</sup>。

キュンクは、例としてキリスト教を挙げる。それによれば、キリスト教とは、世俗的な立場である基本的人権の求めるような人間性を超えて、よりラディカルに人間らしさを進めるものなのである。キュンクは、「下からのキリスト論」の立場に立って、福音書の伝えるイエスの人生や振る舞いそのものに倣う「キリストのまねび」(Nachfolge Christi) をキリスト教の本質だとする。そして、このイエスに倣うことは、キリスト教徒により深く人間であることを可能にするのだという<sup>27</sup>。したがって、宗教の人間らしさと世俗的な立場からの人間性とは対立するものではない。むしろ宗教の人間らしさはより深い人間らしさなのである。

しかしながら、先述の『神は存在するのか』において、キュンクはキリスト教におけるより深い人間らしさについてしか議論しなかった。そのため、諸宗教において、人間らしさがどのような位置づけにあるのかは不明確だった。そのことについて議論したのが、1987年のキュンクの著作『生まれつつある神学』<sup>28</sup>である。この著作にてキュンクは、諸宗教を判断する基準として人間らしさを持ち出す。

#### 4-2. 諸宗教に共通の人間らしさという基準

キュンクは、この人間らしさを諸宗教が善いかどうかを判断する共通の基準として提示する。この基準は、諸宗教が人間らしくあるべきであるという倫理的に求められる側面と、諸宗教がより深い人間らしさを実現するという二つの側面を持つ。

キュンクによれば、この人間らしくある事の意味は、「人間は非人間的にではなく、人間らしく生きるべきであり、人間存在をあらゆる点から実現すべきだ」<sup>29</sup>というものである。そして、その実現に役立つことが善いことである<sup>30</sup>。この基準にしたがって、諸宗教は以下の通りにその善悪が区別される。

- a) 肯定的判断：ある宗教が人間らしさに役立つかぎりで、すなわち、その信仰と倫理の教え、儀式と制度の点で、人間に対して、人間らしいアイデンティティー、意味や価値があることを促し、人間に意味深く実り多い実存を勝ち取らせるかぎりで、その宗教は真で善い宗教である。
- b) 否定的判断：ある宗教が人間らしくないことを広めるかぎりで、すなわち、その信仰と倫理の教え、儀式と制度の点で、人間に対して、人間らしいアイデンティティー、意味や価値があることを妨げ、人間に意味深く実り多い実存になり損なうことを助長するかぎりで、その宗教は誤った悪い宗教である<sup>31</sup>。

このように、宗教を判断する基準として人間らしさが用いられる。一方、宗教は人



間らしさをより深めるという点で諸宗教に共通の基準である側面は、世界倫理にて述べられる。

キュンクは、この世界倫理において、諸宗教に共通の倫理規範として黄金律を挙げる。黄金律とは、諸宗教にて述べられてきた中心的な倫理規範である。例えばキリスト教の「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」である。また、その否定形の形で述べられる、儒教の「己の欲せざるところ、他に施すことなかれ」という倫理規範である。

キュンクによれば、このような黄金律とは、ナザレのイエスによって述べられてきただけでなく、時にはイエスの以前から、諸宗教によっても明確に述べられてきた倫理の力点である。すなわち、諸宗教は、その中心的な倫理規範において人間に対する正しいふるまいを指示してきたのである。そのことから、人間を人間らしく扱うことが、諸宗教に共通の倫理の根本的同意なのである。その意味で、キュンクは「人間」を諸宗教に共通の倫理の基準とするのである<sup>32</sup>。

#### 4-3. 諸宗教および世俗の立場とも共通の人間らしさの基準

キュンクによれば、このような黄金律は、世俗の立場とも共有しうるものである。例えば、カントによってもまた、黄金律は基本的には世俗的かつ近代的な形で述べられたという。それゆえ、諸宗教と世俗の両方の立場にとって、人間をより人間らしく扱うことが倫理的に求められてきたといえるのである。したがって、世界倫理は、諸宗教と世俗の立場の両方に貫して通じる、黄金律の述べる「人間」を共通の倫理の基準とする。その意味で、世界倫理は、「人間」を倫理に関する「根本的合意」<sup>33</sup>とするのである<sup>34</sup>。

しかしながら、このような世界倫理が尊重する「人間」とは、どのような意味の人間らしさであろうか。確かに、「人間」がどの立場にも共通の倫理の基準であるようにみえる。とはいえ、世界倫理に対する批判と同様に、次のような疑問が生じる。すなわち、世界倫理の進展の結果として何かの人間らしさが生み出されるならば、それは結局のところ、諸伝統とは異なった人間に関する新しい理念を作り出すだけの可能性がある。もしくは、その理念の材料は諸伝統にあるが、実際はそれらから抽出された規範をもとにする別の理念にすぎないようでもある。または、共通部分だけを残して残りを放棄する最小主義のようにも見える。加えて、「人間」を基準として選ぶこと自体が、世俗の立場にしたがって決められているようでもある。

しかしながら、本論では、そうではないと考える。この点について、以下ではキュンクの次の論述を中心に検討していく。まず、キュンクは、内側と外側の視点を語り、さらに、世界倫理をエートスとして主張している。そこで、内側と外側の視点に

ついて説明したうえで、エートスとしての世界倫理を内側と外側のそれぞれの視点から考察する。

それを通して、「人間」という基準が、どのような立場に由来するのかが明らかになる。そして、世界倫理には、二つの人間らしくなる事に加えて、二つの人間らしさのあり様があることを指摘する。

## 5. キュンクの対話の手法

### 5-1. 内側と外側の視点

まず、キュンクの述べる内側と外側の視点とは何かを明らかにする。そのために、キュンクと同世代の宗教間対話論者であるジョン・B・カブ・ジュニアの論述を参考にする。彼は、キュンクのことを宗教間対話に最も貢献した神学者だと評価している。そして、キュンクの主張のなかでも世界倫理に注目する。しかし、カブは世界倫理を支持する一方で、キュンクの述べる内側と外側の視点を批判する。

はじめに、この二つの視点について説明する。第一に、内側の視点とは、自らの信仰を求める視点であって、その視点から捉えられた宗教は、外側の視点とは違う地位をもつ。すなわち、内側の視点における宗教は信仰の対象であり、固有の人生と経験の歴史に制限された「私」としての真なるものである。そして、信仰者は、自らの宗教の中に、その人生と死にとっての真理を発見したと信じる。それゆえ、内側の視点において、真なる宗教は自らの信仰の対象のみだけであり、この真理とは、客観的な真理ではなく信仰をもってはじめて意味を持つ「実存的な」真理である。

第二に、内側の視点において真なる宗教があることは、他の宗教が真なるものであることを排除しない。なぜなら、外側の視点にある他宗教は、自らの生死とは結びつかない、知的な対象だからである。すなわち、外側の視点において他宗教は「宗教学的」な視点から眺められるのであり、信仰者は自らの信仰する宗教を絶対視する立場をとる必要がない。その態度で観察すれば、他の人々にとっての救いの道として真なる宗教が複数あることに気付く。それゆえ、この外側の視点では、諸宗教との関わりにおいて排他的な態度を取らない形で諸宗教間の相互の学びあいが行われる<sup>35</sup>。

カブによれば、キュンクがこの二つの視点をを用いることの意義は、基本的人権のような世俗の立場の観点から見出される課題とキリスト教信仰の立場から見出される課題を相互関連させて取り上げることができる点にある。というのは、内側と外側の二つの視点は、別々の分離した視点ではないからである。

例えば、キュンクという人格において、内側の視点であるキリスト教信仰という基準のもとに外側の視点も知的なものとして知られている。すなわち、キュンク自身の

ナザレのイエスに対する信仰は、一人の人格であるキュンクが現代社会の課題に取り組みの中で、その意味が理解され、体験される。その際に、キュンクの内側のキリスト教的視点で捉えられた課題は、外側の視点に基づく理由によって同様に引き上げられる。これとは逆方向に、最初に外側の視点から見出された課題も、次に内側のキリスト教的視点に基づいて捉えられる。二つの視点を持つことで、一人の人間が同じ課題を実存的にかつ知的に相互に翻訳しながら把握することができる<sup>36</sup>。

このような内側と外側の視点という方法に対して、カブは利点と欠点を指摘している。

まず、利点とは、諸宗教の人々や世俗の人々がともに世界倫理に参加しやすいという点である。非キリスト教の人々は、キュンクの内側の視点にあるキリスト教という根拠とそれへの信仰を、自らの宗教や世俗的な価値に置き換えるだけである<sup>37</sup>。

欠点として次の点が挙げられている。すなわち、キュンクの内側と外側という視点に基づく世界倫理が、啓蒙主義の産物のように見えるという誤解を招くという点である。キュンクは彼の信仰の情熱に従って、世俗の立場にととのキリスト教の意義を見出そうとする。その際に、共通の基礎を見出そうとし、世界人権宣言を受容するような「人間」を倫理の根本的合意とする。その結果、キリスト教の人間理解が、世界人権宣言の主張するような人間理解に従属しているように見えるのである<sup>38</sup>。

それでは、キュンクは、より人間らしくあるという意味での「人間」という倫理基準を、どのような議論過程で選択したのだろうか。このことを、内側と外側の視点から順番に検討したい。

## 5-2. 宗教間対話における人間らしさ

まず、外側の視点における「人間」の基準を検討する。キュンクは、1987年の著作『生まれつつある神学』にて、宗教間対話の方法として、「エキュメニズムの基準学」を述べている。その基準学は、二つの基準を持つ。第一に、「人間」である。この基準は「あらゆる人間に課されている人間らしさ」<sup>39</sup>という「一般的な倫理的基準」<sup>40</sup>を要請する。第二に、「一般的な宗教の基準」<sup>41</sup>である。これは諸宗教の教えや実践に、どのような場合であっても中心となる重要な形態である。すなわち、キリスト、ムハンマド、仏陀などである<sup>42</sup>。この二つの基準から成るのが「エキュメニズムの基準学」である<sup>43</sup>。

キュンクによれば、この人間らしさという基準が諸宗教に求められる理由は、次の二つである。まず、各宗教が固有の教えを基準にして他宗教を直接批判することは適切ではないからである。次に、どの宗教も黄金律を説いて、人間らしさの追求を倫理規範の中心におくからである。例えば、キリスト教は、諸宗教を批判する際に聖書を

直接に真理の基準として用いることは適切ではない<sup>44</sup>。

次に一般的な宗教の基準である。キュンクによれば、その基準とは、各宗教に重要な固有のもの事である。例えば、キリスト教にとっては、聖書に証言されているイエス・キリストである。この基準にしたがっているかぎりでは、キリスト教は真で善くあることができる。

しかしながら、キュンクがイエス・キリストという基準を直接用いるのは、キリスト教に対してのみである。これは、どれほどキリスト教がキリスト教的であるかという自己批判のための基準である。そして、他宗教に対しては、同様の基準は間接的にしか用いられない。すなわち、諸宗教の中にどれほどキリスト教に類似しているものが見出されるのかという、諸宗教についての批判的解明のために用いられる<sup>45</sup>。

以上のように、キュンクのエキュメニズムの基準学とは、諸宗教に共通の人間らしさという基準と各々の宗教が持つ固有なものという基準から成ることが分かる。次に、これらの二つの基準を内側と外側の視点から検討する。

まず、各宗教に固有なものという基準は、宗教にとって当然のものである。そして、この視点は、各々の人間の宗教が持つ固有なものに従うことであるので、内側の視点から見ると基準である。また、外側の視点にても、他の宗教の人々が、その人々の宗教に固有なものに従っているかどうかを宗教学的に判断する基準でもある。

次に、人間らしさという基準は、どちらの視点にも属しない。理由は次のとおりである。そもそも、キュンクの主張によれば、宗教とは、より深く人間らしさを実現するものであった。そして、外側の視点とは、定義によれば、諸宗教ごとに複数の真理があるという宗教学的な観察の視点だった。そうであるならば、宗教間対話において、人々は自らの宗教という内側の視点に立ちつつ、外側の視点でもって他宗教の人々とともに宗教をめぐって論じることができる。その際に、人間らしさとは、宗教が含むもののうちの一つのものに過ぎない。そのため、人間らしさが基準として選ばれる必要は必ずしもないのである。

人間らしさという基準が選ばれる理由について、さらにキュンクは、1988年の著作『中国宗教とキリスト教の対話』にて述べている。この著作でキュンクは、文化内開花について論じた。そして、文化内開花のために、文脈化する対象を判断するための二つの基準を提示する。それが、絶対的なものによる迷信の否定と人間らしさの基準である。さらにこの基準は、キリスト教自身を判断する基準にもなる。

本書にてキュンクは、中国を事例にして、「文化背景に則したキリスト教化」を提案する。ここにおいて問題となっているのは、非伝統的キリスト教社会であるアジアにおいて、キリスト教が在来の宗教の影響をどのように受け止めるのかという点である。

この問題についてキュンクは次のように述べている。キリスト教は文化内開花において、宗教混交のような形ではなくて、ナザレのイエスへの信仰を他の伝統の中で文化的・倫理的な面で実現し、周りに影響を与えていくべきである。これが可能であるのは、キリスト教が、非キリスト教の文化的・倫理的価値に最大限に開かれているからである。そもそもキリスト教とは、西欧世界の教会の儀式や教義、文化様式ではなくて、福音書が伝えるナザレのイエスに倣うことを意味する。それゆえ、キリスト教は、西欧世界の文脈を離れて、非キリスト教の伝統を持つ文脈においても、実現可能なのである<sup>46</sup>。

しかしながら、どのような宗教や文化にもキリスト教は文脈化できるのだろうか。この問いの答えとしてキュンクは迷信の否定と人間らしさを問うことという二つの基準を挙げる。まず、迷信の否定という基準は、宗教は相対的なもの、制約されたもの、人間的なものではなく、絶対的なもののみを絶対的権威として承認することを意味する。すなわち、神、ブラフマー、ダルマ、道などである。これとは反対に、相対的なもの、絶対的ではないものを絶対的な権威として承認し、それに対する盲目的な従順を要求することは迷信である。しかし、どの宗教も、本質的でないもの、相対的なものを本質的・絶対的とする場合は迷信になりうる。そのため、迷信と宗教の区別に際して、各宗教の絶対的なものだけでは確実な評価基準にはならず、宗教と似非宗教を区別するにはもう一つの基準が必要になる<sup>47</sup>。

そこで挙げられるもう一つの基準は、人間らしさを問うことである。それは、「宗教は人間に善をおこなわせ、人間を真の意味で人間にしなければならない」<sup>48</sup>というものである。宗教は、人間存在を完成させるか、または人間存在を破壊し傷つけるかのどちらか一方であり、後者ならば迷信である。そして、キリスト教も後者になりうる。したがって、絶対的なものによる迷信の否定と人間らしさを問うことの両方は、文化内開花をしていく対象の諸文化やその文化が持つ諸宗教を判断する基準であると同時に、キリスト教自身を判断する基準でもある<sup>49</sup>。

文化内開花の議論においてもまた、キュンクは、一つ目に、絶対的なものによる迷信の否定という基準を挙げる。これは、「エキュメニズムの基準学」と同様に、イエス・キリストや仏陀といった各宗教に固有なものという基準である。諸宗教は各々の固有な絶対的なものを追求することで、各宗教はより自らの本質に近づくことができる。

二つ目に、この固有なものを間違いなく追求するために、再びキュンクは人間らしさという基準を挙げる。しかしながら、「エキュメニズムの基準学」と同様に、キュンクの主張に従えば、各宗教に固有なものは、本来、より深い人間らしさを指示しているはずである。そのため、この固有のものをさらに正しく追求するために、諸宗教は

人間らしさという新たな基準を取り上げる必要は必ずしもない。外側の視点にて、各宗教の人々は自らの固有なものを客観的に観察することも可能なはずである。そのため、人間らしさの基準は、宗教がより人間らしさをもたらすという内側の視点には結びつかず、しかも外側の視点においても基準として選ばれる理由が不明確なのである。

### 5-3. 人間らしさという基準の問題点

以上のように、キュンクの二つの著作における宗教間対話の意見を内側と外側の視点から検討した。その結果、次のようにその意見を整理することができた。

まず、内側の視点では、各宗教は、固有の絶対的なものを各自の信仰において追求し、さらに自己批判の基準とする。また、固有なものの追求は、宗教がより人間らしくなることを本質的に含んでいる。しかし、この基準を他宗教に直接に用いて批判することはない。

次に、外側の視点では、各宗教は、自らの内側の視点における固有なものの追求を観察し、人間らしくあるかどうかを判断するのであった。また、他宗教の中に自らの宗教と類似のものがあるかどうかを宗教学的に探求し、かつ人間らしくあるかどうかを判断した。しかし、この人間らしくあるかという基準が、諸宗教の教えの豊かさの中から敢えて取り出される由来は不明確であり、宙に浮いたままの基準であった。

このことから次の点が明らかになる。すなわち、キュンクは、宗教間対話において、各宗教が何か共通のものに由来したり、共通の目的を目指したりしているとは判断していない。むしろ、各宗教は、内側の視点にある自らの信仰に沿って、個別に自らの固有の絶対的なものを追求するとしている。その際に、宗教は、どの固有なものに基づく立場であっても、より深い人間らしさを実現することを含んでいるとしている。それゆえ、もし諸宗教が人間らしさを実現するのであれば、それは各々の信仰の立場において、個々の宗教ごとに実現されることになる。

加えて、各宗教に固有なものは、他宗教に自らの宗教と類似のものがあるかどうか知るために用いられていた。そして、この行為は、外側の視点にて行われる。というのも、他宗教に類似のものがあると承認するためには、各宗教の人々の立場ごとに真理が複数あることを認める視点が必要だからである。そして、諸宗教の教えが含むものは、人間らしさに関する事だけではない。そのため、諸宗教の対話においては、人間らしさ以外の内容も類似の事として諸宗教の中に見出されるはずである。したがって、人間らしさの追求は、外側の視点では必ずしも諸宗教が共通して求める優先的な課題にはならない。もしこれを優先的な課題にするのであれば、宗教の内部からであるもの以外の理由が必要になるといえる。この点をキュンクは、世界倫理の議論にて詳細に論じている。

## 6. 段階的な人間らしさの実現

### 6-1. 義務のエートスとしての世界倫理

続いて、世界倫理に関する論述を検討して、このような人間らしくある事が諸宗教に共通の課題として持ち出される理由を明らかにする。

キュンクによれば、世界倫理とは、ドイツ語の「倫理 (Ethik)」ではなく「エートス (習俗、Ethos)」である。そして、世界倫理というエートスは、各々の倫理・哲学的理論よりも深いところにある、それらを支える人間の基礎的態度である<sup>50</sup>。

そもそもエートスとは、マックス・ウェーバーが述べた、ある社会において諸倫理規範を生み出し、人々を動機付けする力を持つ、その社会の根底にある倫理的雰囲気である。また、その社会の背景にある宗教と関係している<sup>51</sup>。

キュンクによれば、同様にエートスである世界倫理は、人々に世界人権宣言に述べられるような人間の権利を擁護する動機付けを生み出す。というのも、動機づけを生み出すのは、エートスが、各々人の個人主義的な行動に対して、人々の異なった立場の間に連帯を促すための、共通の価値、基準、態度に関する根本的同意を含んでいるからである。この共通の価値、基準、態度が人々を連帯の方向へ仕向ける<sup>52</sup>。この意味で、エートスである世界倫理が示すこととは、人間の権利を擁護するような義務としての人間の根本的な在り方なのである。ただし、エートスであるために、世界倫理を承認することは、世俗の人々に信仰を求めることを意味しない。そのため、諸宗教が持つ固有の絶対的なものを世俗の立場の人々が強いられることはない。

### 6-2. 義務としてのエートスが必要な理由

キュンクによれば、このような倫理的義務のエートスが必要な理由は現代西欧社会の特徴に由来する。その特徴とは、西欧社会を特色付ける社会の世俗化、個人主義化、多元化の三点である。この三点が進展するならば、人々に共通の価値が失われて社会の不安定化を招来し、とりわけ自由民主主義に対する信頼が揺らぐ。なぜなら、自由民主主義は、人々の信奉する価値に関して中立を保っている一方で、その存立は、法律によって明文化される前にある特定の意味、規範、態度に関する社会の根本的同意に依存するからである。そして、このような根本的同意が、自由民主主義への信頼を高めている人間的に尊厳のある社会の共生を可能にしている。それゆえ、社会において立法化されないような倫理の根本的同意なしに、民主主義は維持されず、民主主義なしに人間社会は平和的に生き残ることはない<sup>53</sup>。

キュンクはこの根本的同意の必要性という問題に対して、伝統的な規範の復活や、特定の倫理の普及、または価値相対主義的な多元主義によって社会の統合を目指す解

決方法は取り上げない。むしろ、社会の多元性を前提として、多様な人間に受け入れられ有効であるような倫理に関する根本的同意を検討する<sup>54</sup>。

その根本的同意が義務のエートスとしての世界倫理である。エートスは、多元的で世俗的な社会において、キリスト教倫理のような特定の倫理を人々に強制するものではない。むしろ、諸々の文脈において基礎付けられる人間に関する共通の義務的価値を含んでいる。それゆえ、自由民主主義社会の維持にとってエートスは重要である。というのも、民主主義の下で作られる種々の法律は、特定の倫理観に限定されるのではなく、エートスに結び付けられることで、各々の人間において内側の視点からの自主性や自覚的な自己責任に基礎付けられるからである<sup>55</sup>。

このことから、人間らしさが対話に求められている理由が明らかになる。世界倫理において、基本的人権のような世俗の価値を、宗教が豊かにし、諸々の内側の視点にて基礎づけることが試みられているのである。そして、自由民主主義社会が健全に発展するために、諸宗教には世俗の立場に対して、独自の役割と貢献があると考えるのである。

しかしながら、人間らしさが求められる理由は、世俗の立場との対話のための共通点として挙げられているというだけである。本論のはじめに述べたように、キュンクは、そもそも諸宗教が世俗的な人間性を承認して、人間らしくある事が必要だとしている。これが必要な理由は、世界倫理の議論からは明確ではない。しかし、キュンク自身は、先述のように、基本的人権のような人間性を承認しない宗教は、今日、人々に受け入れられないとしている。また、1974年の著作『キリスト者であること』にて<sup>56</sup>、基本的人権などの世俗的価値は、今日、キリスト教が向かい合うべき課題だとして、世俗社会におけるキリスト教の意義を考察した。そのため、諸宗教が人間らしくあるべきだとするのは、世俗社会と宗教をめぐるキュンクの情勢判断の結果である。

ところが、諸宗教が世俗的な人間性を承認して人間らしくあることは、これまでの議論により、内側の視点にて、諸宗教の固有なものに基づいて個別に行われる。その際に、世俗的な人間性は、外側の視点にて観察されて、諸宗教が個別に学ぶ。そのため、世界倫理として、宗教から世俗の立場へと共同して宣言する行為は、各々の宗教が人間らしくなる過程とは異なっている。では、世界倫理とは、諸宗教と世俗の立場との間にて、どのような試みなのだろうか。

### 6-3. 世俗の人間性がより人間らしくなる事と共有の人間らしさ

この世界倫理は、諸宗教が世俗の立場に対して、エートスとして宗教による世俗的価値の基礎づけをする試みである。そのため、個別の宗教ではなく、宗教としての人



間らしさの内容を明らかにしている。

加えて、この世界倫理は、エートスの説明という形で行われる。エートスとは、本来、ある文化的伝統の中に所与として見出されるものである。しかし、世界倫理では、宗教の側が能動的に、世界の諸文化の中にある人々の基礎的な義務のエートスについて説明するのである。この義務のエートスを明示することによって、世界倫理は、諸宗教と世俗の立場の間に真の人間らしさを擁護する態度の涵養を目指すのである<sup>57</sup>。

このような義務について、世界倫理宣言は、「どの人間も人間として扱われなければならない」という根本的要請を述べる<sup>58</sup>。加えて、この人間を具体的に指示するものとして、1. 「生命の畏敬と非暴力の文化への義務」<sup>59</sup>、2. 「公正な経済秩序と連帯の文化への義務」<sup>60</sup>、3. 「誠実な生と寛容の文化への義務」<sup>61</sup>、4. 「男女の協力と同権の文化への義務」<sup>62</sup>という四方針を述べる。

この四方針は、「殺すな、盗むな、嘘をつくな、性的不道徳を犯すな」という諸宗教古来の教えを現代の観点から解釈し直したものである<sup>63</sup>。その解釈は、1948年の国連による世界人権宣言を承認したうえで、さらに宗教者の立場から深めることを目指す。すなわち、世界人権宣言が述べるような人間の尊厳と諸権利を擁護するだけでなく、その擁護並びに行使の結果に対して責任と義務の意識を人々にもたらすことを目指す<sup>64</sup>。

そして、この四方針は、不変のものではない。四方針という人間に関する倫理の最小の合意内容を窓口にして、世界倫理を相互の「意思疎通の過程を通して、拡大・深化」<sup>65</sup>することが望まれている。そのため、世界倫理の目指す人間らしさとは、対話を通して、その共有の内容が増々見いだされてく発見の途上にある理念でもある。つまり、世界倫理が説く人間らしさのあり様は、キリスト教や基本的人権といった特定の人間像をあらかじめ想定しているのではなく、対話の中で徐々に形成されていくのである<sup>66</sup>。

したがって、世界倫理とは、先述の諸宗教における世俗の人間性との対話の次の段階であることが分かる。まず諸宗教が世俗の人間性を承認して自らの人間理解を反省する。その上で、世界倫理において諸宗教は、世俗の人間性の発展のために、それを基礎づけるような人間らしさのエートスを明示する。この世界倫理を前にして、世俗の人々は、自らの人間理解を反省し、信仰なしに宗教の明示する世界倫理に学ぶ。

この世界倫理の示す人間らしさは、宗教の持つ人間らしさのすべてではない。というのも、宗教の実現する人間らしさは、内側の視点では絶対的なものという、世俗の人間性よりも根底に至るからである。そのようなより深い人間らしさの中から、世俗の人間性の基礎づけのために必要なことが、諸宗教からエートスとして明示される。

それゆえ、世界倫理に述べられる人間性の内容は、諸宗教の固有の人間性にとって疎遠だったり不明確だったりしない。それらは、すでに諸宗教の人間らしさの中に含まれているものなのである。

さらに、この世界倫理宣言は、1993年の内容で完成ではない。世俗の立場からの応答と対話を通して、世界倫理はより深められることになっている。それゆえ、世界倫理宣言で終わるのではなく、将来により深く広い範囲にわたって世俗の人間性が宗教によって基礎づけられることが期待されている。それによって、宗教の貢献により、世俗の人間性は、より豊かな人間性となる。そして、その過程で、より豊かな人間らしさの理念が、諸宗教と世俗の立場にて将来に共有されることに至るのである。

したがって、世界倫理において、諸宗教と世俗の立場とは次のような段階的な関係を持つと分かる。まず、前提とされているのは、宗教は、世俗の立場を基礎づけるような根底に至る人間らしさを可能にするという点である。そして、そのようなものである諸宗教は、世俗的な人間性を承認して自己の人間理解を反省する。この反省を経て、諸宗教は固有の絶対的なものの下で、各宗教の伝統におけるより深い人間らしさのあり様を実現する。

次に、そのような世俗の人間性を承認した諸宗教は、協働して宗教としての人間らしさを世俗の立場に対して明らかにする。これは、宗教が貢献して、世俗の人間性を基礎づけ豊かにするための試みである。諸文化に共通のエートスである世界倫理を能動的に明示するのである。それゆえ、示されるものは、宗教の人間らしさに既に含まれている部分のうち、世俗的価値の基礎づけのために必要なものである。したがって、基礎づけのために明示される人間らしさの内容は、諸宗教にも世俗の立場にも、すでにその立場の内部にて存在している。または、宗教の影響によって世俗の立場にこれから明らかになるものである。

その上、世界倫理とは、一度宣言されて終わるものではない。この宗教の側からの提示に応答することで、世俗の立場がより豊かになることが期待されている。というのも、宗教として示される世界倫理の人間らしさをまえに世俗の立場の人々が反省し、自らの人間理解を深めるからである。それを通して、人間らしさを軸にして諸宗教と世俗の立場の人々が相互学習する。その結果、共有の人間らしさの部分が深化・拡大するのである。したがって、世界倫理によって共有される人間らしさとは、すでに定まった理念ではない。むしろ、未来の事を含んでいる。すなわち、対話を通してより明らかになる、将来に共有されていく一つの理念的なより深い人間らしさのあり様である。

## 7. おわりに

本論では、キュンクの世界倫理について考察した。その結果、先行研究では見逃されていた点が明らかになった。すなわち、世界倫理とは、直感的に諸立場の人々に承認されるものではなく、その理解と実現において反省と相互学習という段階論を取っているという点である。それによって、先行研究にて課題であった、世界倫理は諸倫理の文脈においてどのように意味づけられるのかという問題が解消された。

そもそもキュンクは、内側と外側の視点のもとに、各宗教に固有のものという基準に加えて、人間らしさという基準を挙げていた。その論述を詳細に検討した結果、次の段階を追って世界倫理は共有されることが分かった。まず、世俗の人間性の承認を通して、諸宗教の人々は、各宗教固有のものにしたがって反省し、自己の人間理解を改める。その上で、諸宗教が、世俗の人間理解の背景にあるエートスとしての人間らしさのあり様を明示する。それを受けて世俗の人々は、自らの人間理解を反省して、人間らしさをより深く理解する。そして、エートスの点から人間らしくあることを義務づけられる。この反省と相互学習の繰り返しの中で、世界倫理が目指しかつ含んでいる、将来に共有されていく、一つの理念的な人間らしさのあり様が実現されるのである。

しかしながら、キュンクの議論において、次の点がなお疑問である。まず、諸宗教に固有の絶対的なものとは、将来の共有される人間らしさのあり様においてどの様に理解されるのかという点である。次に、宗教として諸宗教の代表が署名して世界倫理を宣言する方法が、最も適切な方法なのかという点である。世界倫理の前提は、価値観の多様な自由民主主義社会である。そのなかで、宗教として一部の宗教の代表だけが宣言する方法は、必ずしもキュンクの議論から導き出されない。

## 注

- 1 本論は、2015年9月の日本基督教学会第63回学術大会（於・桜美林大学）における研究発表をもとに作成した。
- 2 例えば、『地球倫理宣言』、吉田収訳、世界聖典刊行協会、1995など。キュンクの世界倫理は、日本語では、世界倫理のほかに、地球倫理、世界エートス、世界習俗などと翻訳されている。いずれも可能な翻訳であるが、本論では、世界倫理とした。
- 3 本論では、以下の略称を持ってキュンクの著作を表記する。

CS: Christ sein, München: Piper, 1974.

EG: Existiert Gott?, München: Piper, 1978.

CW: Christentum und Weltreligionen. Hinführung zum Dialog mit Islam, Hinduismus, Buddhismus, München: Piper, 1984.

- TA: Theologie im Aufbruch. Eine ökumenische Grundlegung, München: Piper, 1987.
- ChCh: Hans Küng, Julia Ching: Christentum und chinesische Religion, München: Piper, 1988. (邦訳、ハンス・キュンク、J・チン、『中国宗教とキリスト教の対話』、森田安一ほか訳、刀水書房、2005)。
- PW: Projekt Weltethos, München: Piper, 1990.
- EW: H. Küng.; K.-J. Kuschel, (Hrsg.): Erklärung zum Weltethos, München: Piper, 1993. (邦訳『地球倫理宣言』、吉田収訳、世界聖典刊行協会、1995)。
- LW: Hans Küng, “Der Lange Weg zum Projekt Weltethos Zwanzig Jahre nach dem Missio-Entzug. Vorlesung an der Universität Tübingen von 14. 12. 1999”。世界倫理研究所のHP からダウンロード ([http://www.weltethos.org/1-pdf/40-literatur/deu/der\\_lange\\_weg.pdf](http://www.weltethos.org/1-pdf/40-literatur/deu/der_lange_weg.pdf))。
- WWW: Weltethos für Weltpolitik und Weltwirtschaft, München: Piper, 2000.
- WG: Was ich glaube, München: Piper, 2009.
- EM: Erlebte Menschlichkeit Erinnerungen, München: Piper, 2013.
- 4 CW S.621.
- 5 EM S.445-447. 講演の題名は、“Pas de paix entre les nations sans paix entre les religions”
- 6 LW S.16.
- 7 PW S.118-122.
- 8 Idem. S.135.
- 9 シカゴ世界宗教会議 HP 「<http://www.parliamentofreligions.org/content/chicago-1993>」 (2016年9月21日閲覧)。
- 10 EW S.51-55. (邦訳、51-56頁。)
- 11 Idem. S.56-61. (邦訳、57-62頁。)
- 12 Idem. S.25-28. (邦訳、18-22頁。)
- 13 本論の途中でより詳しく紹介する。
- 14 世界倫理財団HP 「<http://www.weltethos.org/>」 (2016年9月21日閲覧)。  
財団設立経緯のページ。「<http://www.weltethos.org/geschichte/>」 (2016年9月21日閲覧)。
- 15 インターアクションカウンシルHP (2016年3月閲覧)  
「<http://interactioncouncil.org/universal-declaration-human-responsibilities-0>」
- 16 Marianne Moyaert, “Ricoeur on the (im) Possibility of a Global Ethic: Towards an Ethic of Fragile Interreligious Compromise”, in: *Neue Zeitschrift für Systematische Theologie und Religionsphilosophie*, 52 (2010), pp. 440-461.
- 17 Martin Robra, “Affirming the Role of Global Movements for Global Ethics”, in: *The Ecumenical Review*, 52 (2000), pp. 471-478.
- 18 Hak Joon Lee, “Toward the Great World House: Hans Küng and Martin Luther King Jr. on Global Ethics”, in: *Journal of the Society of Christian Ethics*, 29 (2009), pp. 97-119.
- 19 高柳俊一「カトリックと公共世界」、稲垣和久・金泰昌編『宗教から考える公共性』、東京大学出版会、2006、149-164頁。
- 20 Gavin D’Costa, *Christianity and World Religions: Disputed Questions in the Theology of Religions*. Wiley-Blackwell, 2009. pp. 164-168.
- 21 ChCh 日本語版序文、VI頁。
- 22 EW S.85. (邦訳93頁。)

- 23 PW S.121.
- 24 Hans Küng, "Towards a World Ethic of World Religions." in: Hans Küng and Jürgen Moltmann (ed.), *The Ethics of World Religions and Human Rights*. SCM Press, 1990, p. 118.
- 25 Hans Küng, *Existiert Gott?*, München: Piper, 1978.
- 26 EG S.628-631.
- 27 CS S.535-539, S.594.
- 28 Hans Küng, *Theologie im Aufbruch. Eine ökumenische Grundlegung*, München: Piper, 1987.
- 29 TA S.292.
- 30 Idem.
- 31 TA S.293.
- 32 PW S.48-50. および、Hans Küng, "Towards a World Ethic of World Religions.", p. 117.
- 33 EW S.20. (邦訳、14頁。)
- 34 PW S.48-50. および、Hans Küng, "Towards a World Ethic of World Religions.", p. 117.
- 35 TA S.298-300.
- 36 John B. Cobb Jr, *Transforming Christianity and the World*, Orbis Books, 1999, pp. 174-175. この著作の一部は、以下のドイツ語著作でも発表されている。John B. Cobb Jr., "Interreligiöser Dialog, Weltethos und die Problematik des Humanum," in: Hans Küng *Neue Horizonte des Glaubens und Denkens ein Arbeitsbuch*, Piper: München, 1993, S.589-606.
- 37 Ibid. p. 173.
- 38 Ibid. p. 174.
- 39 TA S.294.
- 40 Idem.
- 41 Ibid. S.296.
- 42 Idem.
- 43 Ibid. S.274.
- 44 Ibid. S.288.
- 45 Ibid. S.298.
- 46 ChCh S.307. (邦訳、279頁。)
- 47 Ibid. S.86. (邦訳、60頁。)
- 48 Idem.
- 49 Ibid. S.87. (邦訳、61頁。)
- 50 EW S.68-69. (邦訳73-74頁。)
- 51 村田充八『社会的エートスと社会倫理』、阪南大学叢書74、晃洋書房、2005、6-8頁。ウェーバーによれば、人間の行為を直接支配するのは、利害関心のほかに、内的な理念によって作り出された世界像もある。世界像は、利害関心をも方向づける「転轍手」の役割を果たしてきたという（マックス・ウェーバー、『宗教社会学論選』、大塚久雄ほか訳、1972、みすず書房、58頁；大塚久雄、『社会科学の方法』、岩波新書、1966、89頁。)
- 52 WWW S.193-194.
- 53 PW S.61-62.
- 54 Idem. S.93-96. WG S.84.
- 55 WWW S.145.

- 56 Hans Küng, *Christ sein*, München: Piper, 1974.
- 57 キュンクによれば、世界倫理とは、人間が生得的に持っている人権と並んで、そのような権利の擁護を人々に態度づけるような、人間の本来的な義務を意味している (WWW S.144-147.)。
- 58 EW S.25-28. (邦訳、18-22.)
- 59 Ibid. S.29. (邦訳22頁。) ただし、以下4か条の翻訳は邦訳を参考にして筆者が行った。
- 60 Ibid. S.31. (邦訳25頁。)
- 61 Ibid. S.35. (邦訳29頁。)
- 62 Ibid. S.38. (邦訳33頁。)
- 63 この4か条について、諸宗教古来の教えでは、それぞれ主に次のように説明されている。1. 殺すな、積極的な言葉では、生命を尊重せよ。2. 盗むな。積極的な言葉では、公正に正当に振る舞え。3. 嘘をつくな。積極的な言葉では、正直に話し振る舞え。4. 淫らなことをするな。積極的な言葉では、お互いを尊敬し愛せ (EWS.29-40. 邦訳22-35頁。)
- 64 EW S.63-64, 66-67. (邦訳67、71頁。)
- 65 Idem. S.85. (邦訳 93。)
- 66 キュンクは次のように述べている。「人間らしさ」でもって、ある特定の「人間像」が意図されているのではない。「人間像」は、つねにある特別な視点から構想されている — 例えばキリスト教の、ユダヤ教の、もしくはイスラームの、社会主義の、自由主義の、生物学的な、経済学的な人間像である。そして人間像はしばしばおたがいに対立しあう。しかしここで、「人間らしさ」は、諸々の価値、基準についてのある倫理的な根本的要素を意味しており、その根本的要素は、各々の人間像から独立してあらゆる人間に望まれているものである (WG S.86-87.)。